

国際会議報告

2024 中国伝統色彩学術年会への参加報告

Report of Participation in the 2024 Annual Academic Conference on Chinese Traditional Colors

國本 学史

Norifumi Kunimoto

慶應義塾大学, 共立女子大学, 黄冈師範学院, 西安美術学院

Keio University, Kyoritsu Women's University,

Huanggang Normal University, Xi'an Academy of Fine Art

1. 2024 中国伝統色彩学術年会

本稿において著者は、2024年11月15-16日に中国北京市で開催された「2024 中国伝統色彩学術年会」の参加報告を行う。中国伝統色彩学術年会は2016年より開催され、2024年の今回で9回目を迎える。2020年より新型コロナ対応のためオンライン開催が続いていたが、2024年度の参加者は、基本的に北京現地での参加が要請された。本学術年会は、中国国内各地から招聘された研究者等の他、これまでイギリス、フランス、韓国、香港、マカオ、台湾、日本等から専門家が招聘されている。著者は2018年より継続的に招聘されて参加している。本学術年会における日本との重点的な研究交流の継続を2024年も確認できた。中国伝統色彩学術年会は、今後も継続的な開催が期待されている(図1.会場写真)。



図1 開催会場の幕と中国芸術研究院 著者撮影

2. 2024 年中国伝統色彩学術年会の規模・形式

2024年の中国伝統色彩学術年会は、講演24件、内4件は日本の講演者による。オフラインの会議は、規定により一日半での開催が定められ、件数・時間が限られる。会場の大きさの都合もあり、半日あたり450人の参加制限となる。延べ1000人以上の参加申し込みが早期に生じ、登録が予定より早く閉め切られたことが関連の記事で報告されている(聚焦「2024 中国传统色彩学术年会」在北京召开 [https://mp.weixin.qq.com/s/dHUAwpNdfRg08UfM14FDQg] 2024年11月17日記事。2025年1月2日確認)。なお、登録にあたっては、半日単位での登録が必要なために、全講演を視聴するには都合3回の登録が必要となる旨を事務局から説明された。会場は満員であった。

中国国外参加者の講演は、逐次通訳の形で会場内に音声流れる。そのため日本からの講演者は、中国国

内の講演者より5分長い講演時間を与えられる。2020年以来、オンラインを通じて参加者同士の交流が続いていたが、現地でも再会した研究者同士の交流は、対面での学術集会や研究交流実施の意義深さを再認識させた。講演の記録や放映がオンラインで行われることは、開催地から遠方にいる参加者が参加し易いという利点がある。オフラインでの学術集会では参加のハードルが上がり、上述のように参加者数も限られるが、言語や文化背景が異なる者同士が対面で話すことで得られる知見や、質疑時間外に生じる質問者と講演者の交流も体感できた。学術集会の在り方について、あらためて考える機会を得られたと言って良い(図2.会場の様子 著者撮影)。



図2 中国伝統色彩学術年会会場 著者撮影

3. 2024 年度の中国伝統色彩学術年会のテーマ・構成

伝統色彩学術年会という会議名称ではあるが、歴史を学びつつも未来へ繋げる内容が希求される例年の方向性が継承されている。中国芸術研究院院長である周慶富氏による開幕の辞では、伝統的な色彩文化研究を通じて研究のプラットフォームを作る重要性が語られた。

開会にあたり、敦煌研究員の趙声良氏は、異なる民族や地域の影響について学ぶ重要性を述べられた。中国芸術研究院美術研究所副所長の杭春曉氏は、グローバルな視野や様々な分野の専門家の視点を学ぶ重要性について言及された。会議は「伝統色彩」に限定される印象とは異なり、幅広く社会に訴え、その反応を受けて研究が進展することが企図されているように見える。会議の性質と意義については、中国芸術研

究院国画院院長／美術研究所元所長で本学術年会発起人の牛克誠氏による閉会の辞においても強調された。2024年の中国伝統色彩学術年会の主題は、「東方色彩・源派・融匯」で、著者は日本語では「東洋の色彩：源流と融合」と考える。主題の漢字からは、発生して分かれたものが再び合わさるイメージを読み取れる。2024年も、哲学的な問いから、考古学的関心、服飾文化的視座、建築装飾分析等、幅広い領域の専門家が会議に招聘されている。本学術年会は多岐にわたる研究を合わせて学べる場になっており、会議開催の意図や主題の選定スタイルが了解された(図3)。

今回、中国在外の参加者は、中国入国時にビザと会議の招聘状が必要であった。著者の入国審査の際、担当官の興味によるものか、「あなたは日本人なのになぜ中国伝統色彩学術年会に招かれたのか。中国の何時代が好きか」と尋ねられた。そこで、中国の唐時代と日本文化との関わりについて説明し、唐文化の嗜好について返答した。この際、日本と周辺諸国との文化的な交流の歴史や影響を説明する中で、図らずも本学術年会が日本の研究者を招聘する意義を再確認する機会を得たと言える。



図3 招聘講演者の集合写真 学術年会事務局提供

会議は、2024年11月15日と16日の1日半の時間の中で、第1場から第6場まで分けられた。各講演場に振り分けられた講演者はそれぞれ3-4人で、主持人(座長的役割)が司会を担当するのは例年通りである。ただし、質疑時間の確保のためか、例年は主持人とは別の参加者が担当していた講評的なコメントを、今回は主持人が担当した。質疑は盛んであり、研究者・大学院生・非研究者の参加者等、様々な立場の参加者から質問がなされた点を評価できる。

4. 日本からの参加者と会場の注目など

日本からの参加者は、日本建築装飾技術史研究所・窪寺茂氏、横浜美術大学・加藤良次氏、国立民族学博物館・末森薫氏、慶應義塾大学・國本学史の4名(講演順)であった。2024年11月30日より中国入国条件が緩和されたが、学術年会の開催時はビザと招聘状が必要なこともあり、日本からの参加者が限られた側面もある。本会議参加者の末森氏は、偶然にも日本色彩学会の特集「色彩科学と情報技術の有効による文化財研究」『色彩学』2024 Vol.3-1に「古代壁

画の視覚認知解析を目的とする色彩情報処理」を寄稿されている。現地での著者と末森氏との邂逅は、日本色彩学会に多分野・多領域の参加者が集う意義を感じ、日本色彩学会の多様性を再確認出来る体験となったと言って良い。

講演順にいくつかの講演内容を紹介したい。西安美術学院の張楽氏の講演は、「化粧・粉飾」の性質について、絵画表現上の化粧を参照しつつ、人が化粧をする意味、権威としての男性の化粧等、西洋・東洋文化に共通する要素を言及しており、著者はジェンダーの視点も喚起された。自らも染色家である黄榮華氏によって、色名と染色について述べられた講演は興味深い。本学術年会のイベントとして、黄氏による草木染色のデモンストレーションも行われた。日本の色名の参照に関して、藍染めの多彩な色名について黄氏から会議後に鋭い質問を「日本人である」著者にいただいた。服飾の色彩に関して、唐代衣服の紫色について、北京聯合大学の曲音氏と北京服装学院の崔岩氏という、異なる視点2件の講演があったことは興味深い。また服飾の色彩について「動いている時の色彩」という視点を提示された汕頭大学の陳彦青氏の観点は鋭い。私達は静的な対象としての色彩という視点を持ちがだが、見方を変える必要性を提示した内容と言える。その点で、敦煌壁画の配色と色の見え方の違いに言及された末森氏の研究が示されたことは意義深い。國本の研究は、要素還元主義的な色の分け方と人間が持つ色認識の差異等を、色彩の不安定な呼称と関連づけて探る内容であった。人工知能研究等を専門とする研究者複数から会議後も質問を受けたのは、中国の人工知能研究における芸術研究の応用という着眼点が伺えて、興味深い現象であった(図4)。開会・閉会の際には、学術年会の発起人牛克誠氏が、「色粉」は、色のファンと絵画の着色料である色粉が同音的な発音となることを皮切りに、色彩文化研究における参加者(ファン)の重要性、社会との関わりについて言及されていた。社会と学術研究との関わり方の在り方や重要性を模作する姿勢は、学術研究の社会還元性や需要を掘り起こす意味でも、日本の研究機関・団体にとって参考となる。



図4 著者による会場質疑への応答 学術年会事務局提供